

医論第189号


(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論 文 題 目

Predictive factor of distant recurrence in locally advanced squamous cell carcinoma
of the cervix treated with concurrent chemoradiotherapy

(化学放射線療法にて治療した局所進行子宮頸癌における遠隔再発の予測因子について)

氏名 平川 誠 

論文要旨



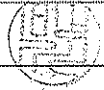
目	的	:	局	所	進	行	子	宮	頸	部	扁	平	上	皮	癌	に	対	す	る
放	射	線	化	学	療	法	同	時	併	用	療	法	に	お	け	る	予	後	因
子	を	検	索	す	る	。													
方	法	:	我	々	は	1	9	9	6	年	か	ら	2	0	0	3	年	の	期
間	に	当	院	に	お	い	て	放	射	線	化	学	療	法	同	時	併	用	療
法	を	施	行	し	た	F	I	G	O	進	行	期	I	b	2	期	か	ら	IV
a	期	の	子	宮	頸	部	扁	平	上	皮	癌	の	患	者	1	0	8	例	に
つ	い	て	解	析	し	た	。	放	射	線	化	学	療	法	同	時	併	用	療
法	の	適	応	は	局	所	腫	瘍	径	が	4	c	m	以	上	か	ま	た	は
骨	盤	内	リ	ン	バ	節	が	有	意	に	腫	大	し	て	い	る	も	の	と
し	た	。	無	病	生	存	期	間	は	カ	プ	ラ	ン	・	マ	イ	ヤ	ー	法
に	て	推	定	さ	れ	、	ロ	グ	ラ	ン	ク	テ	ス	ト	に	て	有	意	差
検	定	を	行	っ	た	。	単	変	量	解	析	は	F	i	s	h	e	r	'
s		e	x	a	c	t		t	e	s	t	を	使	用	し	た	。	多	変
量	解	析	は	C	o	x		p	r	o	p	o	r	t	i	o	n	a	l
h	a	z	a	r	d		m	o	d	e	l	を	使	用	し	た	。		
結	果	:	1	0	8	例	の	年	齢	中	央	値	は	5	0	歳	で	あ	り
観	察	期	間	中	央	値	は	4	8	ヶ	月	で	あ	っ	た	。	4	年	無
病	生	存	率	は	8	3	%	で	あ	っ	た	。	再	発	は	3	2	例	に
認	め	ら	れ	た	。	そ	の	う	ち	2	0	例	が	遠	隔	再	発	で	1

論文要旨

7	例	が	遠	隔	再	発	の	み	で	あ	り	、	3	例	が	局	所	と	遠	
隔	両	再	発	を	認	め	た	症	例	で	あ	っ	た	。	残	り	の	1	2	
例	が	局	所	再	発	で	あ	っ	た	。	多	変	量	解	析	に	お	い	て	
放	射	線	化	学	療	法	同	時	併	用	療	法	終	了	直	後	の	血	清	
S	C	C	抗	原	陽	性	例	が	遠	隔	再	発	に	お	け	る	独	立	し	
た	予	後	因	子	で	あ	っ	た	。	こ	れ	ら	の	4	年	無	病	生	存	
率	は	6	2	.	5	%	で	あ	り	、	血	清	S	C	C	抗	原	陰	性	
例	の	4	年	無	病	生	存	率	8	9	.	2	%	と	比	べ	有	意	に	
予	後	不	良	で	あ	っ	た	(p	=	0	.	0	0	3)	。	注	目	す
べ	き	は	血	清	S	C	C	抗	原	陽	性	例	9	例	中	、	6	例	が	
6	ヶ	月	以	内	に	遠	隔	再	発	を	認	め	て	い	た	。				
結	論	:	治	療	終	了	直	後	血	清	S	C	C	抗	原	陽	性	例	は	
遠	隔	再	発	の	予	知	因	子	で	あ	っ	た	。	こ	の	群	に	該	当	
す	る	症	例	の	遠	隔	再	発	制	御	の	た	め	に	新	た	な	治	療	
戦	略	を	検	討	す	べ	き	で	あ	る	。									

(別紙様式第7号)

論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	平川 誠
論文審査委員	審査日	平成20年8月7日	
	主査教授	吾見直己 	
	副査教授	鈴木幹男 	
	副査教授	石川元 	

(論文題目)

Predictive factor of distant recurrence in locally advanced squamous cell carcinoma of the cervix treated with concurrent chemoradiotherapy

(論文審査結果の要旨)

上記論文に関して、研究にいたる背景と目的、研究内容、および研究成果の意義と学術的水準について慎重に検討し、以下のような審査結果を得た。

1. 研究の背景と目的

局所進行子宮頸癌に対する同時化学放射線療法 (concurrent chemoradiotherapy; 以下 CCRT) は放射線単独療法と比較し、再発の相対危険率を 30-50%改善し良好な予後をもたらしている。しかしながら、CCRT 後の再発の 50%以上は遠隔再発であり、さらに放射線単独治療症例と比較し遠隔再発に対する治療成績の改善を認めないことは、今後検討すべき重要な課題であると指摘されている。そこで本研究では CCRT で治療した局所進行子宮頸癌における遠隔再発症例の予測因子を、多数症例での検討で明らかとし、遠隔再発症例の早期発見と治療法改善に寄与することを目的としている。

2. 研究内容

1996年から2003年に琉球大学医学部附属病院において CCRT を施行した FIGO 臨床進行期 Ib2 期から IVa 期の子宮頸部扁平上皮癌 108 例を解析した。108 例の年齢中央値は 50 歳、観察期間中央値は 48 か月、4 年での遠隔無病生存率は 83%であった。対象 108 例中、再発は 32 例 (29.6%) に認められた。うち 20 例 (62.5%) が遠隔再発であり、その内訳は 17 例が遠隔再発のみ、3 例が局所と遠隔、両者の再発を認めた症例であった。Cox proportional hazard model を用いた多変量解析により、「治療終了時点での血清 SCC 値」が遠隔再発に対する独立した予測因子であった (odds ratio 0.332, p=0.006)。CCRT 終了時の血清 SCC 値が 1.5 ng/ml 以上の症例 26 例中 9 例 (34.6%) に遠隔再発を認め、4 年遠隔無病生存率も 62.5%と有意に不良であることを示した。さらにその 9 例中 6 例が、6 ヶ月以内の再発であり CCRT による治療効果にもかかわらず、微小残存の可能性を示唆する点で注目すべきと考察している。

3. 研究成果の意義と学術的水準

これまで子宮頸癌に対する CCRT 治療例における再発の予測因子を探る研究は、本邦はおろか国際的にも報告はない。本研究は局所進行子宮頸癌の CCRT 治療症例の問題点である遠隔再発において、その遠隔再発症例の予測因子のひとつとしては「CCRT 終了直後の血清 SCC 値」であること、さらにその値が高値の場合には治療後早期に再発が起こることを指摘したものである。この遠隔再発予測因子を用いることにより CCRT 後の遠隔再発症例の早期発見とその治療法改善が可能となり、さらなる治療成績の向上が期待できる。よって研究成果は国際的にも認められる高水準のものであると評価できる。

以上により、本論文は学位授与に十分値するものであると判断した。

- 備考
- 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書とすること。
 - 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。
 - 3 *印は記入しないこと。